

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(22)

この景色はどこかで見たような気がする。急斜面に張り付くようにフナ、イタヤ、ミズナラ、トチノキ、ケヤキ、カツラ、ヤマザクラが生い茂り、今を盛りに赤や黄に色づいている。晩秋の装いである。息子の友達に誘われ、上有住松山の五葉山麓に出かけたときのことである。

十月の下旬、五葉山麓に足を運んでみたくなったのは、今から半世紀以上前にもなるだろうか、五葉山入り口に大きな鳥居を建てるために、その材料となるヒノキを五葉山麓の中腹から運び出した日のことを思い出したからだった。

あの日は穏やかで春風が心地よい、まだ田植えをしていない四月下旬だったように思う。四人でそれぞれ馬を引き、世田米から上有住の松山に向かった。

私は三十歳、妻の弟・村上貞夫二十一歳、橋本兄弟の兄・林蔵二十八歳、弟・忠雄二十六歳。午前八時に世田米を出て、松山の大家に着いたのは昼近くであった。

大家でお昼ご飯をいただき、午後は木だし道の下見、木だし方法の段取り、搬出道路づくりをする。雪解け水で松山川は流れに勢いがある。山あいの集落のはずれにある木橋を渡るとわずかに耕

地が広がり、その奥には五葉山麓がゆったりと大きな体を横たえている。松山集落の終点部にある橋から数分歩いた

ただろうか、天を突いて真っ直ぐ伸びるヒノキが、岩の上にしっかりと根を張っている。林立す

天を突く大鳥居

住田町世田米

村上 米吉

る姿は神々しきさえ漂わっていた。

鳥居に必要なヒノキの本数は四本。すでに木挽きによって切り出されて

おり、直径は優に一メートル超える。今では決してみることもできないほど堂々とした、惚れ惚れするほどの木である。

木の運び出しは翌日から馬四頭で始まった。五

葉山麓の中腹から場所のいい平場まで「中だし」

木で建てた鳥居だ」と心の中で叫んでいた。

まるで松山集落に入る全てのものを受け入れるように、天を突いて聳る。左右の柱に袖を持った美しい鳥居でもあった。

後で聞いたことだが、木材を満載したトラックの通行に支障をきたすこととなり、松山集落を過

期し、馬を引く。こうした木だし作業は一日半かかった。

私は、どのようにあの鳥居が建てられたのか気になっていた。しばらくして、釜石市平田での生コン仕事で、世田米から上有住駅に向かう途中、バスの窓から注意深くみていた。

「どんな鳥居が建っているのだろうか」「あった。あのとき運び出した

年がある。

八十年を超えた人生を振り返るとき、その時間の早さに驚いてしまう。一緒に木出しをしたあの時の三人はもういない。合地沢のせせらぎの音を聞きながら、この沢の上流の景色に似ていた五

葉山麓の豊かな樹木を思い浮かべた。窓からは小春日和の暖かな日が射している。

【執筆者プロフィール】住田町世田米在住、八十七歳。元大工。春は山菜採り、秋にはキノコ採りを楽しむ。気仙川での釣りを趣味とする。水戸黄門、高校野球、プロ野球、大相撲などテレビも「友だち」。

五葉山登山道入り口に立つ筆者。この道の向こうに「天を突く大鳥居」があった

